

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ガイダンス：第3部

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上羽, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008316">http://hdl.handle.net/10502/00008316</a>

## ガイダンス ― 第3部

上羽 陽子

(国立民族学博物館)

第3部では、「ワークショップをふりかえる」と題し、「博学連携教員研修ワークショップ」全体を通しての成果や評価について論じている。

上田らの論考では、「参加者が何を得たのかというワークショップの効果」と「ワークショップのプログラムがどのくらい国際理解教育の目標を達成したのかというワークショップ自体の評価」という2つの課題について、参加者からの視点を加味した議論が展開されている。学校教員を中心とした約100名の参加者と企画者がいかにふりかえりをおこなうか、それが2つの課題を解く鍵となっている。上田らの論考からもわかるように、ふりかえりのプログラムは年々変化し、「参加者その日の経験を自ら意味付け、自分なりの実践をデザインする際に生きる知見として持ち帰る機会（上田ら論考）」にすべく、どのような要素が必要であるかが明快に論じられている。

1つ目の課題については、第3部3.4の「ワークショップから実践へ」が回答的役割を担っている。そこでは、「博学連携教員研修ワークショップ」での参加経験をもとに、自身の教育現場で授業実践をおこなった学校教員による報告が述べられている。それぞれの報告では、教育現場ではどのように応用されているかが明らかになっており、学習指導要領の内容にそってアレンジを加えた活き活きとした授業実践が報告され、本書の魅力のひとつになっている。このような報告は、博学連携の目的の1つであった授業での活用の可能性を考える上で重要な事例報告であり、10年間継続してきた「博学連携教員研修ワークショップ」の結実であるともいえる。

2つ目の課題について上田らの論考では、「博物館や学校といった役割の枠をこわし、国際理解教育の目標に基づいた課題を共有し、その課題解決に向かって相互作用を繰り返し、影響し合う関係性をつくり出すことで現場をも変容させるように博学研修ワークショップをとらえ直すということである」と、新たな議論を構築している。さらに、当日のアンケートの重要性についても指摘している。その内容は、藤原報告に詳しい。

また、第3部では、編者による座談会を付記している。そこでは、参加者の満足度、教員と研究者の強み、オーセンシティをめぐるなどをテーマに、今後の課題を率直に提示している。座談会というインタラクティブな形で10年間の本ワークショップをふりかえり、問題点を洗い出していることが本書の大きな意義となっている。

このように第3部での議論は、10年間の「博学連携教員研修ワークショップ」によって得た知見によるものであり、新たなステージへと展開させるための重要な提言がなされている。